様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０８７７

研究課題名（和文）高齢期における不随意な回想の連鎖的性質の探索

研究課題名（英文）Chaining of involuntary memory recall among elderly adults

研究代表者
野村　晴夫（NOMURA, HARUO）

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：２０３６１５９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：生涯発達上，過去を回想して統合することの重要性が高まる高齢期を中心に，意図せざる不随意的回想の発生機序と帰結を探索した。中高年期から高齢期にある24名を対象に，面接法によって意図的な回想を促した後，日誌法によって日常生活における不随意的回想を収集した。その結果，回想の連鎖的発生が生じている様相が明らかになり，さらに，そうした回想の連鎖が，生活史の意味や随伴感情を変容させている可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：From a lifespan developmental psychology perspective, reminiscence and integration of past life have a developmental implication especially among elderly adults.The present study explores mechanism and outcome of involuntary memory recall. Participants were 24 Japanese middle-aged and elderly adults. Voluntary memory recall were promoted through interviews, and involuntary memory recall were collected with diary studies. The results showed that chaining of reminiscence occured. These results suggested possibilities of modification of meaning of life and accompanied emotions.

研究分野：臨床・発達心理学

キーワード：回想　ナラティヴ　語り　想起　高齢期

１．研究開始当初の背景

高齢期やその準備期間と捉えられる中高年期の回想には，人生や自我の統合感をもたらす生涯発達心理学的機能が想定される。また，統合感を促進するための臨床心理学的介入として，高齢者施設等における回想法の普及がもたらされている。しかし，こうした回想のなかでも日常的に頻発する不随意的回想が，何を契機に引き起こされ，どのような経過を辿って終息し，あるいは他の回想を惹起するのかといった回想の機序は，十分に検討されてきたとは言いがたい。とりわけ回想自体が他の回想を引き起こす連鎖的性質は，ライフストーリーの創出，英知の発揮等の発達心理学的意義に加え，回想法の効果的促進，侵入的想起への対処といった臨床心理学的意義が高いと考えられる。

２．研究の目的

本研究では，随意的な回想である生活史についての自己語り(self-narrative)後に，連鎖的に生じる不随意的な回想が，どのように生じるのかを調べることを目的とした。具体的には，促された自己語りと，その後の不随意的回想の関連性を抽出することを目指した。さらに，こうした回想の連鎖によって，生活史の再編が引き起こされる要因を探索した。

３．研究の方法

・調査対象者：40 代から 60 代にある 24 名（女性 16 名，男性 8 名。平均年齢 60.4 歳）とした。ボランティア関連の集まりで調査趣旨を説明の上，任意の協力を依頼し，自発的に応諾された。全員，日常的な活動性を維持しているとともに，定期的な対人ボランティア活動に従事する健康状態を保っている。

・調査手続き：個別面接法と日誌法を併用した（図 1）。ボランティア活動と関係する生活史をテーマとした個別の生活史調査面接によって自己語りを促進・収集した後，日誌法によって不随意的想起を収集し，さらに事後面接によって日誌法の記録内容を補完した。面接では，ボランティア経験の内容や参加経緯，動機を中心とした生活史を聴取した。日誌法では，面接後の連続する 7 日間，不随意的な記憶想起を毎日 3 個まで，携帯するカードに，記憶想起１個ににつきカード片面１枚，できるだけ想起時から間を置かずに筆記してもらった。記録項目は，想起の状況（日時，場所，行為，契機，気分，その他気づいたこと）と想起した出来事（時期，内容）とし，カードにはあらかじめこれらの項目の見出しを印刷し，記録箇所を明示した。日誌法による調査終了から１週間以内に設けられた事後面接では，日誌の記録内容を確認し，不明瞭な箇所を補完した上で，記録された想起について，想起頻度と開示頻度をそれぞれ「よく思い出す」から「まったく思い出さない」，「よく話す」から「まったく話さない」までの 4 件法で回答してもらった。

・データの分析方針：日誌記録中の想起した出来事の中から，自己語りの面接中に語られた出来事と関連する想起を抽出し，両者の関連性をその特徴に基づいてカテゴリーに類型化した後，想起の帰結として，出来事の意味づけと出来事に随伴する感情をカテゴリーに類型化した。

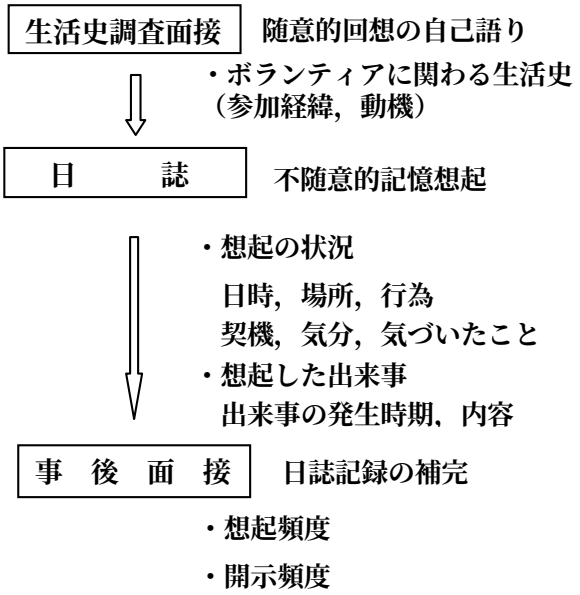

図１　調査手続きの流れ

４．研究成果

(1) 連鎖的回想における関連性

自己語りとの関連性が認められた想起内容を，関連の仕方の特徴に基づいて分類した（表 1）。生活史に関する自己語りという随意的回想は，それらと関連する不随意的回想を引き起こしていた。自己語りという体験が，終了後にも余韻を残し，反芻されている様が伺える。語られた内容と想起された内容との関連性に関しては，「語られた内容の反復的な想起」のカテゴリーのように，自己語りの直接的な影響が現れていたものから，語られた状況，行為，人物の各要素が部分的に想起されるカテゴリー（「同質」，もしくは「新たな想起」を含むカテゴリー）のように，自己語りの間接的な影響を伺わせるものまで抽出された。後者は，自己語りの構成要素の一部が引き金となり，それに関連した出来事が連鎖的に想起を引き起こす可能性を示している。

とりわけ自己語りの登場人物の要素は，その後の想起に多様に現れており，調査対象者との日常的な関係性の上で，緊密な人物から疎遠な人物，ひいては故人が関わる出来事が想起されていた。自己語りによって，他者と共有された過去経験についての記憶が賦活され，想起が促進されたと思われる。

表 1　自己語りと想起内容の関連性を表すカテゴリー

語られた内容の反復的な想起	
定義	面接で語られた出来事の内容が，面接後に繰り返し想起される。
語った状況の反復的な想起	
定義	面接で語った状況における面接者や面接の場が繰り返し想起される
語られた状況と同質の状況についての想起	
定義	面接で語られた状況と類似しているが，登場人物や行為が異なる状況が想起される。
語られた行為と同質の行為の想起	
定義	面接で語られた行為と類似しているが，状況や登場人物が異なる行為が想起される。
語られた緊密な人物についての新たな想起	
定義	面接で語られた人物のうちでも，同居家族や現在の友人など，緊密な関係を保っている人物が関わる出来事が，新たに想起される。
語られた疎遠な人物についての新たな想起	
定義	面接で語られた人物のうちでも，別居家族や過去の友人，勤務先の元同僚など，現在は疎遠な関係になった人物が関わる出来事が，新たに想起される。
語られた故人についての新たな想起	
定義	面接で語られた故人に関わる出来事が，新たに想起される。

（2）連鎖的回想による生活史の再編

自己語りとの関連性が認められた想起を対象に，それらが出来事の意味づけと随伴感情の点で，どのような帰結に至ったかを分析し，類型化した（表 2）。自己語りと関連する出来事が想起されると，出来事の意味づけや随伴感情は繰り返されるばかりではなく，揺らいだり，変わったりし得る。意味づけが反復されるのは，その出来事の意味がすでに揺ぎなく安定していることを表しているのだろう。しかし，面接者という他者を前にしながら出来事を語り，その想起を繰り返すなかで，出来事の意味づけの安定性が揺らぎ，新たな意味づけが与えられもする。また，出来事に随伴する感情も，語り，想起するなかで，変質することがある。過去の出来事に再三接近すると，そこに帯びる感情は，反復されるばかりではなく，また異なる濃淡を持つようになるのだろう。回想が，その後に関連する回想を連鎖的に引き起こし，生活史の意味づけや感情を再編する可能性が示唆された。

表 2　想起の帰結を表すカテゴリー

意味づけの反復	
定義	面接で語られた意味づけと同様の意味づけが繰り返される。
意味づけの変容と付加	
定義	面接で語られた意味づけとは異なる意味づけがなされたり，新たな意味づけが付加されたりする。
意味づけの留保	
定義	面接で語られた意味づけを確定させるのではなく，一旦留保し，また異なる意味づけの可能性を考慮する。
感情の反復	
定義	面接で語られた出来事に随伴する感情が，同様に随伴する。
感情の変容と付加	
定義	面接で語られた出来事に随伴する感情とは異なる感情が随伴したり，新たな感情が付加されたりする。

（3）回想の想起・開示頻度と生活史の再編

「自己語りと想起内容の関連性を表すカテゴリー」（表 1）の中でも，生活史の再編の発露や顕現とみなし得る新たな記憶想起を表すカテゴリーを選定し，それらの出現頻度に基づいて同定した。選定したカテゴリーは，「語られた緊密な／疎遠な人物・故人についての新たな想起」，「語られた状況と同質の状況についての想起」（語られた状況と類似しているが新たな状況についての想起），「語られた行為と同質の行為についての想起」（語られた行為と類似しているが新たな行為についての想起），および，「想起の帰結を表すカテゴリー」の中の「意味づけ／感情の変容と付加」であった。そして，各対象者の全想起件数に，これらのカテゴリーが出現した想起件数が占めた割合が高い者から順に上位 8 名を生活史再編の高群，低い者から順に下位 8 名を低群とした。

自己語り後に不随意的に想起された出来事の日常的な想起頻度，開示頻度が，生活史の再編を促したかを調べた。想起頻度と開示頻度について，生活史再編の高低による差異を，t 検定により検証した（表 3）。その結果，生活史再編の高群は低群に比べて，想起頻度が高く（$t(13)=3.79$，$p<.01$），なおかつ開示頻度も高かった（$t(13)=2.17$，$p<.05$）。日常的に特定の出来事について繰り返し想起して内省する傾向が高いと，その出来事に随伴する感情の強度が減衰したり，意味づけが肯定的になったりするなど，感情や意味づけの変容を伴った生活史の再編が生じ得るのだろう。

表３　想起と開示の頻度と生活史の再編

	生活史再編	
	高群	低群
想起頻度	2.80 (0.46)	1.96 (0.40)
開示頻度	2.15 (0.67)	1.57 (0.34)

注）( )内は標準偏差を表す。

本研究の結果からは，中高年期から高齢期にかけて，随意的な回想である自己語りが，その後に不随意な回想を連鎖的に引き起こしている実態の一端が，明らかになった。すなわち，随意的な回想が，その後の回想の文脈を形成し，生活史における特定のライフイベントを連鎖的に回想させていると考えられた。そして，こうした随意的な回想と，その後に連鎖する不随意的な回想は，生活史の意味づけや，随伴する感情を変容させたり，新たな意味づけや感情を付加させたりする可能性が示唆された。したがって，回想の連鎖は，生活史の再編を促し得るといえよう。

さらに，このような生活史の再編を促す回想の連鎖の規定因を探索した結果，頻繁な想起と合わせ，頻繁な開示が関与している可能性が示唆された。繰り返し想起されることや，それが他者に向かって開示され，語られることは，もともとの生活史の記憶の変容を含む生活史の再編を引き起こしていると考えられる。

中高年期から高齢期には，前半生を見直し，人生の道行きの意味を問い直す発達課題を有している。一部の対象者はまさにその渦中にあり，ボランティア活動への参加経緯を問うた本研究のように，限定的なテーマの面接であっても，現在進行中の人生上のテーマ（関心や悩み等）と符合することで，それが生成的な面接となり，終了後の記憶想起等の心的活動が賦活されたのではなかろうか。この機序は，ライフレビューに通じると思われる。自己語りと関連する想起の登場人物には，現在は疎遠な人物や故人が含まれていた。中高年期から高齢期におけるこれらの関係性の喪失と相まって，自己語りの調査面接にあっても，ライフレビューに類した過程が引き起こされたと推察される。また，先行研究からは，自ら思い出そうとする随意的想起に比べ，不随意的想起は，感情への影響力が大きいことが予測されているが，本研究の結果はその傍証となる。

ただし，本研究の調査対象者は，中高年期から高齢期初期にあたるため，より高齢の，さらには，個人差のある高齢期に，本研究の結果が一般化可能性を有するかは，将来のさらなる研究をまたねばならない。また，こうした連鎖的回想を引き起こした際の調査面接における面接者との相互作用性を，今後は考慮する必要があるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①野村晴夫，クライエント・ナラティヴと心理療法の多元性，大阪大学大学院人間科学研究科紀要,査読無，42,2016,257-272.

②野村晴夫，生活史面接後の「内なる語り」：中高年の不随意的想起に着目した調査，心理臨床学研究，査読有，32，2014，336-346.

③野村晴夫，ナラティヴ・アプローチが照射する心理臨床の主観と客観：協同構成される物語の方向性と共有可能性に着目して，人間性心理学研究，査読有，32,2014，79-86.

④野村晴夫，語りからデータを得て実証する，臨床心理学増刊，査読無，6, 2014, 66-72.

〔学会発表〕（計７件）

①野村晴夫，心理臨床における想起と語り，日本心理臨床学会第 34 回大会，2015.9.20，神戸国際会議場.

② NOMURA HARUO, Loss experiences in self-narratives and involuntary recall in Japanese older adults, 17th European Conference on Developmental Psychology, 2015.9.11, Braga, Portugal.

③ NOMURA HARUO, Exploration of factors associated with involuntary memory recalls after self-narratives in middle aged and elderly adults, 14th European Congress of Psychology, 2015.7.9, Milan, Italy.

④ NOMURA HARUO, Involuntary memory recalls after self-narratives in life-history interviews, 28th International Congress of Applied Psychology, 2014.7.10, Paris, France.

〔図書〕（計２件）

①野村晴夫，臨床ナラティヴアプローチ(2015)，ミネルヴァ書房，森岡正芳（編），pp.97-109.

②野村晴夫，発達心理学事典(2013)，丸善出版，日本発達心理学会（編）pp.22-23.

６．研究組織

(1)研究代表者

野村　晴夫 (NOMURA HARUO)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：20361595